

管内で発生した豚サーコウイルス関連疾病（PCVAD）とその対策

東部家畜保健衛生所 ながいやすこ 永井泰子 いとうまさこ 井藤雅子

【はじめに】今年度、病性鑑定により PCVAD あるいは豚呼吸器複合病（PRDC）と診断した管内の養豚農家 2 戸で、豚サーコウイルス（PCV2）に対するワクチンプログラムの変更により被害が軽減されたため、その概要を報告する。

【発生状況】事例 1 は母豚 190 頭規模、事例 2 は母豚 250 頭規模の一貫経営農家。発生状況は、両農場ともに離乳後における発育のばらつきが見られ、死亡する個体が増加。

【材料及び方法】事例 1 は離乳舎への移動時期が異なる 30～50 日齢 8 頭を、事例 2 は 45 日齢の離乳豚 1 頭を解剖し、主要臓器について常法に基づき細菌学的検査、ウイルス学的検査及び病理学的検査を実施した。また、PCV2 垂直感染の有無を調べるため、去勢睾丸滲出液から遺伝子の検出を試みた。事例 2 については発育ステージ毎の血清検査も実施した。

【対策及び効果】事例 1 は、各種検査結果から細菌感染を併発した PRDC と診断した。睾丸滲出液から PCV2 遺伝子が検出されたことから、PCV2 の垂直感染により事故率が増加したと推察される。指導前も PCV2 ワクチンを接種していたが、30 日齢のみであった。このことから以下の 3 点について指導した。①垂直感染を止めるために母豚群への一斉接種を指導した。②自家育成で更新率を上げていたことから、ワクチン効果の切れた候補豚が母豚群に PCV2 を持ち込んだことが推察されたため、垂直感染を起さないように、候補豚繰り上げ時の確実なワクチン接種を指導した。③PCV2 の被害が最も大きい 30～90 日齢を守るため、子豚の接種日齢を 15 日齢に変更を指導した。事例 2 では主要臓器及び血清から PCV2 遺伝子が検出され、病理所見と合わせて PCVAD と診断した。離乳時に PCV2 ワクチンを接種していたが、ワクチン接種時の取り扱い失宜により PCV2 の効果が無効化されてしまっていたと推察された。このことから、当該ワクチン使用上の注意点を説明したほか、別の PCV2 ワクチンを用いたプログラムも紹介し、自農場にあったワクチンを選択してもらった。

いずれの農家においても、指導後に事故率は低減し、改善している。

【まとめ】今回の事例から、①候補豚にワクチンを接種してウイルス増殖を抑え、母豚に PCV2 を持ち込まない、②離乳後の子豚での被害を防ぐため 14～21 日齢でワクチンを接種するという 2 点を実施することで PCV2 はコントロールできるということが改めて確認された。また、各ワクチンの特徴を説明し、正しい使用方法を周知することも家保の重要な役割であることが再認識された。